A Report of the Special Exhibition by Students at Kanazawa University Museum in 2020, “Kanazawa University’s Former Schools seen in the photos, Part II - Tracing the origins of modern medicine”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: FURUTA, Tetsuro, OOKI, Saeko, MATSUNAGA, Atsushi, KAWAI, Nozomu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065774

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

学生による企画展の報告
「写真で見る前身校Part Ⅱ～キンダイ医学の源流を辿る～」

A Report of the Special Exhibition by Students at Kanazawa University Museum in 2020, "Kanazawa University's Former Schools seen in the photos, Part II – Tracing the origins of modern medicine"

古田哲朗(1)、大木紗英子(2)、松永篤知(3)、河合望(4)

Tetsuro FURUTA, Saeko OOKI
Atsushi MATSUNAGA, Nozomu KAWAI

(1) 金沢大学大学院　人間社会環境研究科　博士前期課程
Master's Course, Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University
(2) 北海道大学大学院　文学院　人文学専攻
Division of Humanities, Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University
(3) 金沢大学資料館
Kanazawa University Museum, Kanazawa University
(4) 金沢大学　新学術創成研究機構　金沢大学資料館副館長
Institute for the Frontier Science Initiative and Kanazawa University Museum, Kanazawa University

Abstract

In this article, we look back on the student's exhibition "Kanazawa University's Former Schools seen in the photos, Part II : Tracing the origins of modern medicine," at Kanazawa University (9/11/2020-20/01/2021) and it will be evaluated by the students who actuary participated in this exhibition program. Kawai and Matsunaga introduce this article, presenting the background of the special exhibition by the students at Kanazawa University as a part of the class "Museum Training" and the overview of the class schedule. Furuta discusses Chapter 2, 4, 5, 6, while Ooki discusses Chapter 3. In Chapter 2, Furuta explains the idea of this exhibition, and provides selection and research of the materials in Chapter 3, focuses on the display of the exhibition in Chapter 4, describes on the exhibition devices in Chapter 5, discuses related events in Chapter 6. Finally, Matsunaga, who is another instructor of the class and a curator of Kanazawa University Museum, considers this significance of the special exhibition conducted by the students in the University Museum.

1. はじめに ー博物館実習と学生による企画展

金沢大学では2014年以来、博物館学芸員資格履修科目の「博物館実習」の授業の一環として学生による企画展を開催してきた。文部科学省による博物館実習ガイドライン（2009年度版）では2単位相当の学内実習および1単位相当の館園実習が推奨されている[1]。これまで学生企画展は、学内実習の一部として位置づけられ、館園実習は学外の博物館・美術館で行われていたが、金沢大学資料館が2016年4月に北陸の大学で初めて博物館相当施設に指定され、学生企画展の内容も館園実習の内容に匹敵することから、金沢大学資料館の協力により2019年度より学生企画展の実施を以て館園実習を行ったことになると認定された。

金沢大学資料館は、1989年の開館より学芸員養成課程への協力と連携を行なってきたが[2]、学生による企画展が開催されたのは2014年度の「植物図「館」」が最初である[3]。以降、翌2015年度には「破かれた恋愛小説～『寒潮』に翻弄された四高生」[4]、2016年度には本学が所蔵する物理実験機器を紹介した「ハカリモノ－文系学生が紹介する科学実験機器」[5]、2017年度には金沢大学の伝統的な学生寮であった北溟寮の閉鎖を承けて、100年あまりにおよぶ本学学生寮の歴史・伝統を紹介した「バンカラ寮生類」[6]、2018年度には金沢大学資料館が所蔵する資料がどのような経緯を経て資料館に所蔵されるに至ったのか、収蔵資料の「数奇な」来歴にスポットライトを当てた「物録（モノローグ）－資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」[7]、2019年度には、金沢大学資料館、金沢大学附属図書館、金沢大学埋蔵文化財調査センターが所蔵する資料を彩る「色」に着目し、金沢や金沢大学にゆかりのある資料を赤・青・金の3色に分け、資料の彩色に利用されている技術や原材料などを紹介することを目的とした「いろは―多彩な技術から見る色の世界―」[8]と続いた。

本稿で論じる2020年度の学生企画展は、7度目の学生企画展「写真で見る前身校Part Ⅱ～キンダイ医学の源流を辿る～」である。2020年度は、開始当初からコロナ禍により対面授業が行えなくなり、オンラインでの授業を余儀なくされた。博物館実習という実習系の授業をオンラインで実施することは困難であり、授業の進め方についてはゼロから考え直さなければならなかった。第1クォーターでは金沢大学資料館のVirtual Museum Projectや学術資料データベースを用いて個々のヴァーチャル・ミュージアムを作成する課題に取り組ませた。そして、登学禁止が解除された後の6月25日の授業でその成果の発表を行った。対面授業が再開されたことにより、これまでと同様に学生企画展を開催する必要性があることから、資料館のスタッフと相談し、資料館の企画展「写真で見る前身校PART Ⅰ」の第2弾を学生企画展とすることに合意し、金沢大学医学類の前身校の歴史を展示することになった。本来であれば、資料館の資料に基づいて学生自身に企画展の内容も提案させるべきであるが、コロナ禍の状況に鑑みて、資料館と教員側からテーマを伝え、作品の選定と展示構成については学生の自主性に任せるという方針で進めた。そして、企画展のサブタイトルについては学生自らが提案を持ち寄り、「～キンダイ医学の源流を辿る～」となった。このサブタイトルの「キンダイ」には、金沢大学の略称である「金大」と時代区分の「近代」をかけて、「金大」における「近代」医学の歴史を皆さまと一緒に辿りたい、という意味が込められた。タイトル・テーマが決定すると、以後実習生は資料・キャプション班、デザイン班、展示班の3班の役割分掌に基づき、それぞれの立場から本企画展のアイディアを討議することに授業時間を費やした。昨年度までは、資料班、キャプション班、デザイン班、展示班の4班構成であったが、資料班とキャプション班の資料共有や協働が上手く機能していなかったことから、今年度は資料班とキャプション班を統合して資料・キャプション班とした。実習生は計15名で、それぞれの班は4名または7名で構成

された。第2クォーターの終わりまでには、資料・キャプション班が資料館側が予め提示した資料の中から展示資料を選択して暫定リストを作成し、資料の詳細な調査を行った。なお、企画展の構成は、第1章「医学系前身校の系譜」、第2章「近代医学の発展を支えた人物」、第3章「医学教育の起源と発展」、第4章「医学教育が生かされた臨床現場」となり、これに合わせて展示品の選択と調査が進められた。また、資料・キャプション班はこの間にキャプションと解説の作成も同時に進めた。デザイン班は7月からポスター案やキャプションのデザイン案の作成を開始し、10月にはそれぞれを完成させた。展示班は展示計画を作成し、什器サイズの計測、資料の状況確認、光源・設計位置確認などを行い、10月末には展示の配置案を決定した。なお、夏季休暇中も各班の作業が継続されたことを明記しておく。夏季休暇明けの第3クォーターの11月9日の開催までは急ピッチで作業が行われた。しかしながら、コロナ禍が収束しない状況が続いたことから、学生や外部の方々を招いて行っていた従来のワークショップの開催は断念し、学内限定のミュージアムツアーを開催することになった。学内限定としたところから教員の発案でミュージアムツアーを動画で撮影し、動画投稿サイトに配信するという形をとった。ミュージアムツアーについては、11月12日に班を編成し、準備を進めた。そして、12月14日から18日の昼休みに1回ずつ、計5回開催し、動画を編集して動画投稿サイトに配信した。これらの取り組みも博物館における教育普及活動のみならず、動画を用いた発信の仕方を学ぶ良い機会となったと考える。今回の学生企画展は、コロナ禍により準備期間が短くなり、通常よりも約2ヶ月少ない4ヶ月あまりの間に準備を進めなくてはならない厳しい状況にあったが、15人の実習生はそれぞれが役割を全うし、素晴らしい企画展を開催することができたと評価したい。実習生の大半が卒業論文の執筆を抱えていた4年生であり、その中で一通りの学芸員業務を進めた彼らに敬意を評したい。なお本稿では、第2章の学生企画展の流れ、第4章の展示室の構成と設営、第5章の展示に関する制作物、第6章の教育普及活動の実施の全てに関して古田が執筆し、第3章の資料調査と展示資料の選定を大木が執筆した。そして、末尾の第7章で担当教員の松永が結論も兼ねて全体を振り返り、大学付属の資料館で学生による企画展を行う意義について考察する。

最後に、教員として実習に関わる際に留意した点を記したい。第一に金沢大学の博物館実習では学生の能動的な活動を確保するためアクティブ・ラーニング方式を採用してきた。2020年度の実習生は15名であり、前述のようにこれを資料・キャプション班、デザイン班、展示班の3班に編成した。毎週の授業では、1限から2限にかけて議論・作業（約165分）→議論・作業の報告（15分)」というサイクルを繰り返し、学生が主体的に取り組めるよう、教員は各班のアドバイザーや全体のオブザーバーの立場に徹した。この方式に促されて学生の問題解決能力・調査能力・ディスカッション能力はもとより、コミュニケーション能力までもが飛躍的に向上したと思われる。さらに近年実習生であった大学院生をティーチング・アシスタントして配置し、自らの経験を元に実習生に非常に懇切丁寧なアドバイスを行なった。

二点目は、班体制と役割分掌を明確化することに意を注いだ。実習生は先述のように15名3班編成である。各人が担当する業務の進捗は各班長により把握され、各班の議論・作業の進捗は全体リーダーによりマネジメントされる。企画展オープニングまでのタイト・スケジュールが学生の焦りに拍車をかけたことも否めないが、展示までの準備期間を通じて学生の主体性と責任感において著しい成長が見られた。今回は資料とキャプションを担当する班を1つに統合したため、昨年度まで見られた班別で仕事を分担した反面、縦割りになってしまい、班同士の連携がうまくいかない場面は解消されたと考える。

三点目はテクニカルな点である。金沢大学の博物館実習では、これまでにもソーシャル・ネットワークやクラウド・サービスを活用してきた。これにより学生が自主的に会議を行っていたことに加え、FacebookやLINEといったソーシャル・ネットワーキングが功を奏していたが、Facebookでは個人のプライバシーが共有されてしまう面もあるため教員の判断でLINEのみを使用することにし、円滑に情報の連絡、共有が進められた。またクラウド・サービスも有効に活用され、文書や図、写真などを共有しながら遠隔地にいながら作業を進められるという利点があった。これはコロナ禍においては特に有効な手段であった。

四点目はコロナ禍における博物館展示の工夫である。前述のように2020年度の学生企画展は外部への公開は禁止し、学内関係者のみを対象とした展示となった。このような制約によりミュージアムツアーの動画配信が初めて試みられた。これにより、学内外に広く学生企画展の関心を喚起することができた。また、企画展会場ではソーシャル・ディスタンスを示す印と順路を示す印など来館者が密にならないような工夫も見られた。コロナ禍のような想定していない状況下における博物館展示の工夫について学んでいただけたと思う。

金沢大学では博物館実習を受講するには原則として実習以外の博物館関係科目を全て履修していることが条件となっている。そのため、必然的に実習生の大半が4年生になる。実習生は就職活動や教育実習、そして卒業論文という学生生活の大きな山場に直面する。また博物館実習を終えたとしても、学芸員として採用される学生は稀である。こうした忙しさや採用条件の厳しさにもかかわらず、博物館実習で企画展に取り組む意義とは何か。第一に、博物館実習を通じて、学生の学習効果や人格的成長に留まらず、学生生活を通じて何事かを成し遂げたという達成感にある。第二には、博物館実習を通じて博物館学芸員の業務を一通り経験することにより「ミュージアム・リテラシー」とでも呼ぶべきものを身につけた人材を世に送り出すことにあろう。博物館は一般に資料の収集・保存・研究の場と捉えられがちである。しかし、ミュージアム・リテラシーを身につけた人材を輩出することは、将来、博物館が豊かな生涯教育の場として市民生活に根付いていく一助となるのではないかと考えている。本学の博物館実習は、資料館スタッフの献身的なご協力のおかげで、学生企画展を通じて「生きた」実践的博物館実習を提供することができているとも言えよう。

（河合・松永）

2. 学生企画展の流れ

本章では、学生企画展「写真で見る前身校PARTⅡ～キンダイ医学の源流を辿る～」のコンセプトの決定と準備作業、企画展開催後の成果について述べる。ここでは特に、企画展のコンセプトの決定に至る経緯と、実習生の活動日程を詳述し、展示資料の調査、展示室の構成と展示作業、展示に関する制作物、関連企画等の実施の詳細に関しては、次章以降に譲る。

⑴ 学生企画展に向けた班設置

学生企画展に向けて、2020年7月から本格的に活動を開始した。まず博物館実習の授業で企画展を行う上での注意事項等を実習生全体で共有した後、2019年度の博物館実習報告書を参照しつつ実習生の班分けを行った（表1）。班については、資料調査とキャプションの執筆を担当する資料・キャプション班、展示室の構成計画を担当する展示班、ポスター・パネルなどの制作物を担当するデザイン班の3班を設置した。

今期の企画展に携わった実習生は計15名であり、資料・キャプション班7名、展示班4名、デザイン班4名とし、それぞれの班に班長を1名ずつ置いた。以下、上記3班を「基礎班」とする。加えて全体の進行・指示や資料館職員と教員との連絡を代表して行うリーダー1名とサブリーダー1名を、基礎班と兼任する形で置き、さらに、それぞれの基礎班同士のコミュニケーションを円滑に行うために、リーダーとサブリーダー、そして上記3班の班長から成るリーダー班（計5名）も設置した。

11月からは、教育普及活動に従事する班としてミュージアムツアー班を結成した。実習生全員が教育普及活動としてのミュージアムツアーに携わるように、計15名の実習生を、それまでの基礎班を再編する形で、3名ずつ計5班のミュージアムツアー班に配置した。

⑵ 学生企画展のコンセプトの決定に至るまで

例年の学生企画展では、金沢大学資料館の収蔵資料を用いた展示を行うこととなっている。今回の実習では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行にともない、4月から登学が禁止されたため、まずは各個人が資料館のVirtual Museum Project[9]や学術資料データベース[10]の収蔵資料を基にそれぞれヴァーチャル・ミュージアム案のパワーポイントを作成し、登学禁止が解除された後の6月25日の授業で発表した。また、この日の授業では、学生企画展のテーマについて、登学禁止による準備期間の制約などから、資料館の前期企画展「写真で見る前身校PART Ⅰ」（2020年6月19日～10月26日）の第2弾「写真で見る前身校PART Ⅱ」とすることに決定した。

コンセプトは、各班の班長及び全体のリーダー・サブリーダーが作成した素案に基づき、金沢大学医学系前身校の歴史に着目した内容とした。具体的には金沢大学医学系前身校の当時の様子を主に古写真を通して来館者にイメージしてもらうことを目的とし、学内からの来館者に日々私たちが学んでいる金沢大学がどのようにして北陸の近代医学を担ってきたのかを理解してもらうような展示を行うこととした。今年度は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、来館者を原則学内者に限定せざるをえなかった。

サブタイトルについては、各班から提案を持ち寄り、7月30日に実習生全体が参加するコンペを経たうえで、「～キンダイ医学の源流を辿る～」に決定した。

⑶ 各班の準備活動及び企画展の成果

今回の博物館実習履修者は15名であり、作業は各班に分かれて行い、必要に応じて他班と連携しながら活動した（表2）。このため、情報共有を正確に行う必要があり、その手段として主に実習時間内の冒頭と終わりに各班の進捗状況や今後の予定について共有した。加えて、実習授業外の連絡はSNSを利用した連絡や、Webクラウド・サービスを使用した資料等の情報共有を行い円滑な進行を試みた他、各班が自主的に会議等を行い作業の進捗を共有した。

展示の進行計画については、教員が立てた年間計画に基づき、6月25日の授業以降、ティーチングアシスタント（TA）と全体リーダー・サブリーダー及び各班の班長が授業後に随時集まって調整していった。

タイトル・テーマを決定した後、前期の期間（夏季休業前）では、資料・キャプション班は資料館側があらかじめ提示した資料のうちから展示資料を選択して暫定リストを作成し、資料の詳細な調査を行った。収蔵庫で実際に資料の確認を行ったのち、金沢大学医学部記念館からの借用資料の再検討を経て、8月13日の前期最後の授業までに最終的な展示資料リストを決定した。また資料・

キャプション班は、この間にキャプション内容と解説パネルの作成を上述の作業と同時進行で行った。同じく前期の7月からデザイン班はポスター案やキャプションのデザイン案の決定及びその作成に取り掛かり、10月8日にポスターを入稿し、22日にキャプションを完成させた。展示班は展示計画の作成を進め、什器サイズの計測や資料の状況確認、光源・設計位置確認、柱の太さの計測、資料館職員からのアドバイスなどを受けて10月28日に展示の配置案を最終決定した。

後期からは展示の際のキャプションやパネルなどの制作物を中心に作成し、10月28日～29日、11月4日～6日の展示作業を経て、2020年11月9日の開催初日を無事に迎えた。

開催初日以降は、11月12日に、それまでの各基礎班を再編する形で新たに5つのミュージアムツアー班を結成し、教育普及活動としてミュージアムツアーを準備・開催した。ミュージアムツアーは12月14日～18日の昼休みに1回ずつ、合計で5回開催し、その様子を動画で撮影して編集した後に動画投稿サイトに配信した。1月20日に展覧会を終え、同月21日に撤収作業及び最終報告書の作成を行った。

表1. 班割りと学生の内訳

班	所属	学年	役職
展示	人間社会環境研究科博士前期課程 人文学専攻	2年	班長
	国際学類	4年	
	人文学類	4年	全体サブリーダー
	人文学類	3年	
デザイン	国際学類	4年	班長
	人文学類	4年	
	人文学類	3年	
	人文学類	3年	
資料・キャプション	自然システム学類	2年	班長
	人文学類	4年	
	人文学類	4年	
	人文学類	4年	全体リーダー
	人文学類	3年	
	人文学類	3年	
	人文学類	3年	

表2. 各基礎班の活動日程

月	日付	資料・キャプション班	デザイン班	展示班
7	2	グループ・役職の決定		
	9	資料についての文献調査 資料の選定・資料構成検討	ポスター・使用色案の検討 イラストレーター操作確認	資料班との情報共有 展示の大枠について検討
	16	資料の絞りこみ・展示構成検討	ポスター案決定・製作開始 パネルデザイン案決定	企画展の見学・資料の確認 展示スペースについての相談
	21	全体：実技実習		
		資料選定・資料リスト共有 解説パネルの枚数と内容の検討	ポスター表面制作	サブタイトルを検討 展示資料（写真）の確認と実測
	30	全体：実技実習		
		キャプション作成	ポスター表面制作	サブタイトルの検討
8	6	全体：実技実習・企画展サブタイトルの決定		
		キャプション作成進捗報告	ポスター表面制作	展示案の検討
	13	全体：各班の活動報告とその共有・後期のスケジュール設定		
		キャプション校正・第1稿提出 解説パネルの内容検討と調査	ポスター表面（第1稿）完成 ポスター用写真の撮影	展示計画の作成・共有
夏季休業		キャプション修正 各自で解説パネル作成	ポスター裏面　第1稿　完成 医学部記念館での資料撮影	展示案の修正
10	1	パネルの内容決め・写真決め	ポスター修正・改訂版完成	展示案の修正・共有
	8	班内での解説パネル内容の校正 解説パネル第一稿を提出	キャプション製作開始	展示修正案・今後の作業の検討 展示案の修正箇所を全体に連絡
	15	解説パネル用写真の撮影	キャプション製作 キャプション第1稿完成	展示予定の写真資料のスキャン 展示ケース内の資料配置の検討
	22	あいさつパネルの執筆 解説パネルの修正	キャプション修正・改訂版完成 パネル製作開始	ミュージアムツアーの企画
	29	あいさつ・解説パネルの修正 展示作業	パネル製作 展示に使用する付図の製作	展示作業
11	4	展示作業	パネル製作・修正 パネル印刷	展示作業
	5	展示作業	パネル修正 パネル印刷 パネル貼り作業	展示作業
	6	展示作業	パネル貼り作業	展示作業
	9	企画展開催		
	12	全体：ミュージアムツアーの班および班ごとのツアー内容の決定、報告書作成		
	19	全体：ミュージアムツアーのシナリオ作成と読み合わせ、およびタイトルの決定		
	21		バナー製作	
12	10	ミュージアムツアーのリハーサル		
	14	ミュージアムツアー		
	15	ミュージアムツアー		
	16	ミュージアムツアー		
	17	ミュージアムツアー		
	18	ミュージアムツアー		
	25	ミュージアムツアー動画の配信		
	26	ミュージアムツアー動画の配信		
	27	ミュージアムツアー動画の配信		
	28	ミュージアムツアー動画の配信		
	29	ミュージアムツアー動画の配信		
2021, 1	21	撤収作業、報告書作成		

⑷ 評価

ここでは、計画・進行、情報共有、記録の観点から学生企画展の流れの評価について述べる。

まず、計画・進行について、今年度は新型コロナウイルス感染症の流行によって、例年とは異なるスケジュールで計画を立てる必要性に迫られた。そこで、前年度の実習生であったTAと協力して具体的な授業計画、各班の作業内容、締め切りを決めることによって、余裕をもった計画を立てることができた。今年度のようにイレギュラーな計画を立てなくてはならない場合は、実習生だけでこれを行うことは難しく、博物館実習についてよく理解しているTAと連携しつつ計画・進行を進めていくことが重要になると考えられる。また、授業計画を立てるうえで、過去の報告書を参照すると良い。

情報共有については、実習授業内外において、SNSを用いた連絡が作業を円滑に進めるうえで重要な役割を果たした。また、Webクラウド・サービスを利用して資料等を全体に共有することによって、他の班の進捗状況を確認することができたことに加え、教員及び資料館職員との情報共有や意思疎通を円滑に進めることもできた。こうしたSNS及びWebクラウド・サービスは、特に、感染症予防のため全員が教室に集まれない場合や、長期休暇中に作業を進める際に有用である。一方で、各基礎班の進捗状況や作業内容の把握について、基礎班間の調整は各班の班長が行っていたが、それぞれの班長が把握している内容が必然的に自分の所属する班の作業に関するものに偏る傾向があったため、班ごとに縦割りが生じないような工夫を講じるべきであった。例えば、各班と資料館及び教員との間の連絡メールを、全体リーダー・サブリーダー及び他班の班長も見られるようにすれば、各班の進捗状況や連絡内容を互いに把握・共有することができ、班を横断する作業を行う際に作業が円滑に進むことが期待される。

（古田）

3. 資料調査と展示資料の選定について

本章では、企画展の資料概要を述べた後、資料調査と展示資料選定に関して詳述する。

⑴ 展示資料の概要

本企画展は、金沢大学資料館と金沢大学医学部記念館が所蔵する資料を用いて、金沢大学医学系前身校の歴史に着目した内容となっている。具体的には、金沢大学医学系前身校の当時の様子を主に古写真を通して来館者にイメージしてもらうことを目的としている。メインを写真資料に据えたが、それらの資料の他、医学系前身校の設置許可証やお雇い外国人の教師が用いた講義録などのモノ資料を用いて、学校の設立から講義の様子まで来館者が理解できるように資料を選定した。

⑵ 展示資料選定・資料調査

金沢大学資料館から示された資料リストを元に、資料班内で企画展のコンセプトに合う資料を選出した。選定は、まず古写真から行い、その後、それに対応するモノ資料を選定していった。モノ資料については、写真資料や医学部記念館から借用する資料との関連を踏まえて、全体で展示の流れやバランスを検討しながら資料を絞り込んだ。このとき、展示班や資料館とも相談し、資料の大きさ・点数・展示方法などを加味して検討していった。

展示は、第1章「医学系前身校の系譜」、第2章「近代医学の発展を支えた人物」、第3章「医学

教育の起源と発展」、第4章「医学教育が生かされた臨床現場」の4つのパートに分かれていたため、このパートごとに資料班で担当を決め、基本情報（名称・資料番号・年代・寸法など）を文献で調査した。参考文献として使用したのは、『金沢大学医学部百年史』（金沢大学医学部百年史編集委員会編1972）などである。

作成した基本情報をもとに、8月～9月にかけての夏季休暇中にキャプションを作成していった。具体的には、決定した資料について、エクセルで作成したフォーマットに資料館のデータベースや各自文献で調べた情報をまとめ、キャプションを執筆した。班内で先述したように担当を分担し、各自で作業を行った後、フォーマットを統一した。その後、資料館職員と教員に校正を依頼し、修正を加えた上で、デザイン班に提出をした。

また、解説パネルは、展示の4パートに合わせて一枚ずつ作成した。パネルで取り上げる内容については、事前に相談し、執筆はそれぞれ担当を決めて各自で進めた。班内で確認と校正をした後、資料館職員と教員に校正を依頼した。指摘された箇所を修正した後、デザイン班に提出する作業を繰り返した。パネルの作成は、10月以降に開始し、およそ1ヶ月で完成した。

⑶ 資料の借用

本企画展では、金沢大学資料館の他に、金沢大学医学部記念館の資料を借用した。次の頁に示したのは、展示した資料の一覧表（表3）である。医学部記念館からは、計16点の資料を借用した。

表3. 展示資料リスト

学生企画展出品資料リスト					
番号	資料名	請求番号	寸法（幅×奥行×高さ cm）	所蔵場所	備考
	①医学系前身校の系譜				
1	草野写真コレクション　金沢医科大学			金沢大学資料館	
2	草野写真コレクション　金沢医学専門学校			金沢大学資料館	
3	草野写真コレクション　石川県金沢病院			金沢大学資料館	
4	草野写真コレクション　金沢大学医学部，金沢大学薬学部正門			金沢大学資料館	
5	草野写真コレクション　医学館と生徒			金沢大学資料館	
6	官立金沢医学専門学校設置許可証	103-Ca13	26.5×4.5×35	医学部記念館	
7	金沢医学専門学校印	151-Ca4	6×6×7.5	医学部記念館	
8	金沢医科大学印	152-Ca3	8×8×11	医学部記念館	
9	金沢医科大学要覧	201-LC5	22×15×5	医学部記念館	
10	金沢医科大学一覧	202-LC6	19×13×1	医学部記念館	
11	金大医学部附属病院設計図	(仮7)	74.0×75.25	金沢大学資料館	
	建築資料小計　11				
	②近代医学の発展を支えた人物				
1	草野写真コレクション　津田淳三			金沢大学資料館	
2	草野写真コレクション　黒川良安			金沢大学資料館	
3	草野写真コレクション　スロイスとともに			金沢大学資料館	
4	草野写真コレクション　山龍幹医長			金沢大学資料館	
5	草野写真コレクション　金沢医科大学長　須藤憲三			金沢大学資料館	
6	草野写真コレクション　石川県病院医長　ア・ホルトルマン			金沢大学資料館	
7	草野写真コレクション　医学館教師　ベイ・ア・スロイス			金沢大学資料館	
8	惚松閣文庫：2　ホルトルマン講義録	883-F33	12×18×1	医学部記念館	
9	大礼服の帽子			金沢大学資料館	
10	儀礼刀			金沢大学資料館	
	人物資料小計　10				
	③医学教育の起源と発展				
1	草野写真コレクション　外科手術と臨床講義			金沢大学資料館	
2	草野写真コレクション　金沢医学専門学校学生			金沢大学資料館	
3	解剖一件　第四高等中学校医学部	12-Cd16	20×28×3	医学部記念館	
4	胎児模型（子宮内）妊娠7ヶ月	407-Cg6	26×32×15	医学部記念館	
5	眼球運動模型	491-Cg14	32×32×32	医学部記念館	
6	第四高等中学校医学部学生全員と教官らの写真	517-B32	80×60×2	医学部記念館	
7	明治28年第四高等学校医学部第1回卒業生	519-B19	46×39	医学部記念館	
8	ドドネウス和蘭草木誌（和蘭本草書）	571-Cl4	25×39×12	医学部記念館	
9	解体新書　序図1-4	575-Cl3	18×26×1	医学部記念館	
10	ウェーバー　ヒトの骨・神経図　TAB.ＸＸＸⅡ	490-02-103-223	69×52.35	金沢大学資料館	
11	医学部授業時間割　校長室用		未計測or不明	金沢大学資料館	現在展示中
	教育資料小計　11				
	④医学教育が生かされた臨床現場				
1	草野写真コレクション　一等病室			金沢大学資料館	
2	草野写真コレクション　二等病室			金沢大学資料館	
3	キモグラフィオン	302-B43	17×17×42	医学部記念館	
4	肋骨剪刀	318-Cj8	37×22×2	医学部記念館	
5	人工心肺装置の写真	526-Ba26	44×57	医学部記念館	
6	医療機器カタログ				
	臨床・研究資料小計　6				
	資料総計　38				

（2020年8月12日作成）

⑷ 評価

ここでは、資料の選定やキャプション等の作成作業について評価する。資料選定は、資料班内でコンセプトや展示品同士の関連性などを深く協議したうえで行うことが出来た他、資料全体の中から目玉展示を決めたことで、視覚的にも内容をわかりやすく提示できた。また、キャプションやパネルの作成については、どちらも予定していた通りに進めていくことができた。既に博物館実習の単位を取得しているTAと予定を事前に組み、それに沿って進めることができたからである。また、コロナ禍だったことで、資料の実物を見るのが遅くなってしまった点は悔やまれるが、文献調査で資料に関する情報量を補ったり、キャプションやパネルとは別に、理解を助けるための年表や図を作成したりするなど、創意工夫を行うことができた。

反省点として挙げられるのは、資料選定の際の連携がうまくいかない部分があった点である。資料館とできる限り密に連絡をとってはいたが、より密に連携していくことが今後の課題である。その際、リーダーと資料館、資料班と資料館という連携だけでなく、班同士の連携にも気を付けていく必要がある。

（大木）

4. 展示室の構成と設営について

本章では、展示室の構成と設営について述べる。

展示室の構成を決定するために、資料館の収蔵庫を訪れて実際の資料の状態を確認し、各資料の撮影や法量の実測調査、什器の詳細なサイズの確認といった作業を通して、展示資料や什器に関する詳細なデータを記録した。これらのデータに基づいて展示構成案を作成し、資料館との調整を通し数度の修正を経て、展示室の構成を決定した。

10月22日に展示資料のうち写真資料の額装作業を実施し、2020年10月28日よりパネル・キャプションの印刷、パーテーションへの写真資料の設置、什器の設置、写真資料以外の展示資料の搬入・設置・調整、パネルの設置、資料及び什器の位置の微調整、什器清掃、ライティング調整の手順で展示作業を行った。「⑵ 展示室の設営」の節では、特にこの展示作業部分について述べることとする。

⑴ 展示室の構成内容

展示室は、第1章「医学系前身校の系譜」、第2章「近代医学の発展を支えた人物」、第3章「医学教育の起源と発展」、第4章「医学教育が生かされた臨床現場」の合計4つのパートから構成される。今回の企画展では、金沢大学医学系前身校の当時の様子を、主に古写真を通して来館者にイメージしてもらうことを目的としたため、草野写真コレクションを中心とする写真資料の比重が大きかった。また、展示室の正面には本企画展の目玉展示として「眼球運動模型」を配置した（図1～3)。展示室内の順路は時計回りとし、一方通行とした。これに加え、パーテーションを例年より1枚増やすことによって、展示スペースを広めに設定した。今回は新たに、感染症対策としてソーシャル・ディスタンス（社会的距離）を示す印をラインテープで作成し、床に貼るかたちで設置することを試みた。

「眼球運動模型」は、本来は第3章「医学教育の起源と発展」に属する資料であるが、展示資料のうちでもひときわ目立つ外観であることと比較的サイズが大きいことから、資料館の外からでも

すぐに目に入るような目玉展示となることを期待して、展示室の正面（入口と出口の間）に配置した。

第1章「医学系前身校の系譜」では、現在の金沢大学医学類へと連なる歴代の医学系前身校の校舎を撮影した写真や「金沢医学専門学校設置許可証」などの歴史史料と図面に加え、これらの前身校で使用されていた印章を展示した。また、関連年表のパネルを展示することによって、来館者が各医学系前身校から現在の金沢大学医学類へと至る歴史を理解できるよう工夫した。なお、当初案では本章を医学系前身校の建築について扱う章としていたが、建築よりも各前身校の歴史や現代とのつながりについて扱った方が有意義であると判断し、最終的に本章のトピックを「医学系前身校の系譜」とした。

第2章「近代医学の発展を支えた人物」では、黒川良安（加賀藩彦三種痘所）、スロイス（金沢医学館）など、各医学系前身校を通して石川における医学の発展に貢献した人物に関する資料を展示した。そのうち「儀礼刀」と「大礼服の帽子」は、ともに金沢医科大学2代目学長の須藤憲三が使用していたものであり互いに強い関連性を持つため、同一の什器内に隣接して配置した。

第3章「医学教育の起源と発展」では、各医学系前身校における当時の医学教育に関する資料に加え、『ドドネウス和蘭草木誌』や『解体新書』といった江戸期の医学教育関連資料も展示した。特に『ドドネウス和蘭草木誌』と『解体新書』は見開き状態での展示が不可能であったため、見開き状態を撮影した写真をパーテーションに掲示する形で展示した。また「胎児模型」は、容器を兼ねる子宮模型の内部に胎児模型が納められている形をとるため、内部の胎児模型が見えるように子宮模型の蓋を開けて展示した。

第4章「医学教育が生かされた臨床現場」では、医学系前身校で当時行われていた教育が臨床の現場でどのように生かされてきたのかに注目し、当時の病室の写真の他、「キモグラフィオン」や「肋骨剪刀」といった臨床・研究の場で使用された医療器具などを展示した。このうち「キモグラフィオン」は高さが42cmと比較的大きかったため、内寸の高さが最も大きい（45cm）什器に入れて展示した。また「肋骨剪刀」は、表面のメッキの経年劣化が進んでおり、什器内に直接置くとメッキが什器内に敷かれたフェルトと擦れて剥がれ落ちてしまうため、調湿紙を敷いたアクリル製の台座に載せて展示した。

本企画展で展示した写真資料のうち、草野写真コレクションに属する資料はスキャンした上でA3サイズに引き伸ばしてアクリル製の額に入れ、これをパーテーションに掛ける形で展示した。

来館者への観覧の補助として、展示室入口に企画展開催の旨を伝える看板を設置した他、先述のソーシャル・ディスタンス（社会的距離）を示す印に加えて順路を示す印もラインテープで作成し、展示室内の床に設置した。

⑵ 展示室の設営

展示室の設営は、実習の授業時間及び10月28日～29日、11月4日～6日の5日間に行った。授業時間以外の設営作業は、原則として金沢大学における2～4限の時間帯に行った。展示室における設営作業は、展示班と資料・キャプション班を中心に、4～5名を目安としてシフトを組んだ。これと並行して、パネルの印刷・作成も資料・キャプション班とデザイン班を中心に行い、印刷作業が終了し次第展示室の設営作業に合流した。

資料の展示について、「肋骨剪刀」に関する参考資料として、展示資料と同じ型の肋骨剪刀が掲載されていた医療器具のカタログ（1914年刊行）を追加し、「肋骨剪刀」と同類の什器内に配置し

た。また、展示室内の来館者移動スペースを広げるために、第3章と第4章の什器の位置に若干の変更を加えた。展示作業の様子を写真記録として撮影し、最終日の11月6日には掃除及びライティング調整を行った。

⑶ 評価

展示構成の構築にあたって、展示班のメンバー全員が各自の展示案を考えてきて、これらの展示案を擦り合わせていくことによって、展示構成を比較的円滑に構築することができた。また、展示の章ごとに展示班メンバーの役割を分担してそれぞれの章の展示構成を決めたことも、展示構成を構築する上で大いに役立った。こうした展示班内の動きと並行して、早い段階から資料・キャプション班及びデザイン班と頻繁に連絡をとり、常に基礎班同士の連携を図ったことも、展示構成の円滑な決定に寄与したと考える。その一方で、什器のサイズをめぐって資料館側との間に認識の相違があり、また、特に医学部記念館所蔵の資料は展示作業開始の直前まで実物を見ることができなかったこともあって、展示資料の詳細な位置を全て決定することまではできなかった。什器内の詳細な位置を決定できなかった資料については、展示作業の際に、状況に応じてその位置を決定した。このことから、各基礎班の間だけでなく、資料館側とも緊密に連携することも重要であるといえる。

設営にあたって、展示作業時に印刷した展示構成案を資料館展示室内に置き全員で共有した他、作業時に展示班のメンバーが少なくとも1人は必ず展示室にいて進捗状況を確認できるようにシフトを調整することで、展示作業を円滑に進めることができた。また、上述したように実際に什器に入れてみるまでは詳細な位置を決定できなかった資料については、当初から状況に応じて柔軟に対応できることを意識して展示構成案を作成していたため、展示作業においてその詳細な位置を全て決定することができた。一方で、設営・展示作業の様子を記録として複数の写真に撮ったが、作業完了後の展示室の写真記録も撮るべきであった。

（古田）

全体図【最終案】
什器Ver
1/100（1cm=1m）



①ガラス低（のぞき）【4台】
奥行き70cm/横100cm/ケース高さ29.8cm/
全体高さ89.7cm
②のぞき正方形【2台】
奥行き56cm/横56cm/ケース高さ15cm/全体高さ90cm
③ガラス大型（のぞき）【2台】
奥行き79cm/横167cm/ケース高さ40cm/全体高さ90cm
④ガラス高足【2台】
奥行き46.5(44.5)cm/横46.5(44.5)cm/
ケース高さ40(39)cm
⑤ガラス古文書（のぞき）【1台】
奥行き48.3cm/横138.4cm/ケース高さ14.8cm/
全体高さ90cm
⑥アクリルケース【1台】
奥行き45cm/横45cm/ケース高さ45cm
⑦イーゼル　幅61cm
⑧パーテーションボード
横126cm/高さ180cm（厚さ3cmで計算）

図1．展示室の構成（什器）

全体図【最終案】
展示品Ver
1/100（1cm=1m）



35 眼球運動模型（幅32cm×奥行き32cm×高さ32cm）

27　金沢医学専門学校設置許可証
（幅26.5cm×奥行き35cm×高さ4.5cm）
28　金沢医学専門学校印（幅6cm×奥行き6cm×高さ7.5cm）
29　金沢医科大学印（幅8cm×奥行き8cm×高さ11cm）
43　金沢大学医学部附属病院平面配置図（74.0cm×75.25cm）
30　金沢医科大学要覧（幅15cm×奥行き22cm×高さ5cm）
31　金沢医科大学一覧（幅13cm×奥行き19cm×高さ1cm）

41　ホルトルマンの講義録　内科脚気論（12cm×18cm）
45　大礼服の帽子（ケース：縦23cm×横52.4cm×高さ6cm）
46　儀礼刀（本体：長さ81cm×柄7cm
刀掛台:長さ40.6cm×高さ37cm×奥行き15cm）

26　解剖一件（幅20cm×奥行き28cm×高さ3cm）
37　医学部第一回卒業生（幅46cm×奥行き39cm）
40　解体新書（幅18cm×奥行き26cm×高さ1cm）
47　医学部授業時間割　校長室用
（本体:縦24cm×横17.3cm/見開き横298cm×高さ8cm）
36　医学部学生全員と教官らの写真
（幅80cm×奥行き60cm×高さ2cm）
34　胎児模型（幅26cm×奥行き32cm×高さ15cm）
39　ドドネウス和蘭草木誌（幅25cm×奥行き39cm×高さ12cm）
42　ウェーバー　人の骨・神経図（縦69.0cm×横52.35cm）

32　キモグラフィオン（幅17cm×奥行き17cm×高さ42cm）
33　肋骨剪刀（幅37cm×奥行き22cm×高さ2cm）

図2．展示室の構成（展示資料）

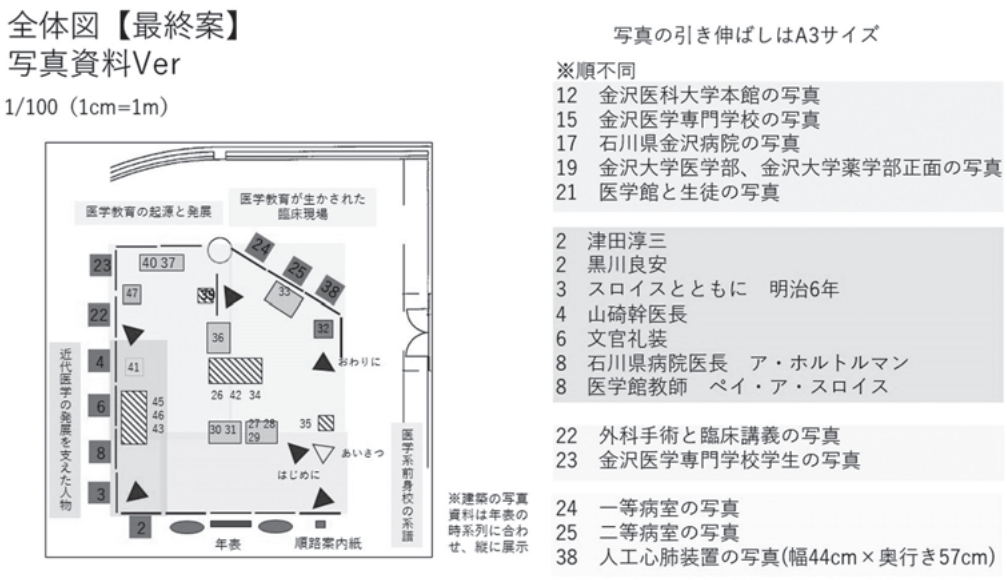


図3. 展示室の構成（写真資料）

5. 展示に関する制作物について

本章では、企画展に関連する制作物について述べる。本企画展での製作物は主に、展示資料の基礎的な情報及び資料解説を記すキャプションや、企画展全体や各章の趣旨と年表、資料の付図を提示するパネル、企画展の広報としてのポスター・チラシとなっている。加えて第4節「その他制作物」において、以上に挙げた制作物以外についても触れることとする。

⑴ キャプションの構成と作成

キャプションは、上記の通り展示資料の基礎情報及び資料解説を示す目的のために作成した。原則として1点の展示資料につき1点のキャプションを作成することとし、最終的に計36点のキャプションを作成した。キャプションに記載する内容としては、原則として資料名、年代、所蔵館名及び解説文を記し、資料名と年代及び所蔵館名は日本語と英語を併記した。

展示資料に関する情報の調査と、調査で得た資料情報に基づくキャプション原稿の執筆は資料・キャプション班が担当し、資料館職員及び教員に原稿の校正を依頼した。キャプションのデザインと作成は、デザイン班が担当した。

⑵ パネルの構成と作成

パネルの種類は、大きく「挨拶パネル」、「章立てパネル」、「年表パネル」、「資料付図」の4種類に分類される。挨拶パネルは、館長と実習生一同による「ごあいさつ」、「はじめに・注意事項」、「おわりに」の計3枚、「章立てパネル」（図4）は「第1章医学系前身校の系譜」、「第2章近代医学の発展を支えた人物」、「第3章医学教育の起源と発展」、「第4章医学教育が生かされた臨床現場」の計4枚、年表パネル（図5）は「＜年表＞」の1枚、資料付図は「ドドネウス和蘭草木誌」、「解体新書」、「金沢医学専門学校印・金沢医科大学印」の計3枚で構成した。

「挨拶パネル」と「章立てパネル」及び「年表パネル」の原稿は資料・キャプション班が執筆し、資料館職員と教員に校正を依頼した。これらのパネルに「資料付図」を加えた全てのパネルのデザイン及び作成は、デザイン班が行った。

⑶ ポスター・チラシの構成と作成

企画展の広報用印刷物として、ポスターとチラシを作成した。ポスター（A2、縦、カラー）は片面とし、タイトル、サブタイトル、資料写真、場所、会期及び開催時間、休館日、金沢大学ロゴ、問い合わせ先、協力機関で構成し、加えて新型コロナウイルス感染拡大防止のため閉館する場合もある旨を記した注意書きも添えた（図6）。チラシ（A4、縦、カラー）は両面とし、チラシ表はポスターと同じ内容とデザインを採用した。チラシ裏は企画展紹介、資料写真とその紹介、アクセスマップ、ミュージアムツアー開催の告知で構成した（図7）。ミュージアムツアーの詳細な内容及び日程は、新型コロナウイルス感染状況次第で中止することも想定されたためポスター及びチラシに掲載しなかった。

ポスター及びチラシの作成にあたり、その準備として、デザインは「写真で見る前身校PARTⅠ」のポスターを参照しつつ、デザイン班メンバーが各自ポスターのレイアウト案を作成し、その中からデザイン班内で話し合ってポスター最終案を決定した。決定したポスター案を基にAdobe Illustratorでポスターを作成した。ポスター表面には草野写真コレクションで展示するものを掲載し、チラシ裏面には医学に関する資料の写真を掲載することとした。それに伴って、金沢大学資料館及び医学部記念館にて、掲載する資料の写真撮影を行った。

今回の企画展は、金沢大学医学部とその前身校をテーマにしていることから、金沢大学のスクールカラーである「なす紺」と金沢大学医薬保健学域のイメージカラー（ピンク）を主に使用することとし、ポスターなどのレイアウトのデザインに組み込んだ。この使用色は、展示室の各種パネルにも使用した。

⑷ その他製作物

その他の展示に関する制作物として、告知メール、資料館Webサイト用バナー及び企画書の作成を挙げる。

告知メールは、金沢大学の学内メールであるアカンサスメールから学内に向けて送付する告知メールを指す。このアカンサスメールを通して、企画展開催に関する告知メール、ミュージアムツアーの告知メール、ミュージアムツアー動画配信の告知メールを準備・送付した。企画展開催告知メールにはチラシ（PDF）を添付し、ミュージアムツアー告知メールでは各回の開催日時とタイトルを掲示するとともに、動画配信告知メールには各回のミュージアムツアー動画のリンク先を添付した。

資料館Webサイト用告知バナーはタイトルとサブタイトルで構成した。作成はデザイン班が担当し、ポスターを基礎にデザインや掲載資料を決定した。決定したレイアウト案をIllustratorで作成してこれを全体に共有し、資料館へデータを送付した（図8）。

企画書はリーダー班が作成し、会期、時間、展示場所、主催、協力機関、企画名称、展示コンセプトを記載するとともに、出展資料リストと展示レイアウト図を添付した。

⑸ 評価

キャプションについて、早い段階から準備を進めてきたため、資料付図を作成するなど資料をより理解しやすくなるような工夫をすることができた。また、資料館から提示された資料だけでなく、実習生が各自で調べた内容を追加することで、豊富な内容のキャプションを完成させることができた。一方で、資料そのものの情報だけでなく、当時の様子などの関連情報も載せた方が良いということにもっと早く気付くべきであった。また、展示資料の実物を見る機会が展示作業直前までなかったので、二次資料に頼った情報しか出せなかった。キャプション原稿に関しては、年代や英語名及び誤字などの修正が多かった。加えて、1点のキャプション内でのフォントの使い分けや統一に気を付ける必要がある。

パネルについては、各パネルの担当者の間で早めに情報を共有していたため、パネルの内容が重複することを防止することができた。また、展示資料の補足やコラムといった豆知識を盛り込むことで、来館者が展示資料を理解するための手助けとすることができた。スケジュールに関しては何度か変更はあったものの、基本的に作業はスムーズに進行した。しかし、一方で、挨拶パネルの執筆が印刷作業の直前までかかったため、パネル印刷作業が余裕のないものとなってしまった。また、学校名などの事実関係が複雑で何箇所か間違えていたり、句読点の修正漏れがあったりしたため、事実関係や誤字・脱字などの確認は重要である。加えて、チェック及び修正作業が印刷直前までに間に合わない可能性があるため、資料・キャプション班とデザイン班とでチェック・修正作業の期限を決めておくと良い。完成したパネル自体は興味を引く内容にすることができたが、その中には周囲の展示と関連性の低い内容になってしまったパネルもあった。

ポスター及びチラシについて、本企画展のポスターをポップなデザインにすることで、前期企画展「写真で見る前身校PART Ⅰ」のポスターとは異なるオリジナリティを出すことができた。一方で、展示しない資料を途中までポスターに使用していたため、確認が必要であった。また、ポスターの掲載に際しては、事前に掲載場所を確認する他、どこに何枚送付・掲示したかを把握及び記録するべきである。

（古田）



図4.　章立てパネル



図5.　年表パネル



図6.　ポスター・チラシ表面



図7.　チラシ裏面



図8.　資料館HP用バナー

6. 教育普及活動等の実施について

例年の博物館実習では教育普及活動としてミュージアムツアーとワークショップを実施していたが、今年度は新型コロナウイルス感染症予防のため、ワークショップの実施を見送った。従って本章では、教育普及活動として実施したミュージアムツアーとその動画の作成・公開について述べることとする。

⑴ ミュージアムツアーの実施

ミュージアムツアーは2020年12月14日～18日の5日間で行い、実施時間は原則12時15分～12時30分の15分間とした（5分間の質疑応答を含む）。来館者に展示資料や資料に関連する人物への興味を持ってもらえるように、月曜日は「本企画展の“目玉”!?高安右人って誰!? ～眼科発展のひみつ～」、火曜日は「キンダイ医学におけるお雇い外国人の活躍」、水曜日は「ドドネウスによる精緻な植物書」、木曜日は「解体新書コソコソ噂話」、金曜日は「博士の愛したハサミ」と、実施日ごとに多様な展示資料及び人物に焦点を当てた（表4）。

本番は各日3名が担当し、担当者ごとに本番で用いるシナリオを作成した。内容としては、資料自体の概説に加え、キャプションに載っていない情報（資料・人物調査の過程で知った逸話、展示作業中の工夫や苦労話など）を盛り込んで解説することで、ミュージアムツアーでのみ得られるような知識を提供した。加えて、各回では、クイズを出題するといった来館者参加型の要素を取り入れた。前週の12月10日にはリハーサルを行い、シナリオの読み合わせをして教員及び資料館職員から助言を得た。本番当日には、資料館に隣接する金沢大学附属図書館の図書館職員の許可を得て、本番実施前（12時10分頃）に館内放送でミュージアムツアー開催を告知する放送を行った。

本番終了後は、まず当日の午後に、その日のミュージアムツアーを担当した班のメンバーが、ミュージアムツアー動画の編集作業にあたった。ミュージアムツアー動画の詳細については次節に述べる。加えて、各ミュージアムツアー班が振り返りのための活動記録資料（開催日時・タイトル・担当者名・参加人数・良かった点・反省点）を作成し、Webクラウド・サービスにアップロードすることで全体への共有と引き継ぎとした。ミュージアムツアーには、5日間で計73人が参加した（図9）。

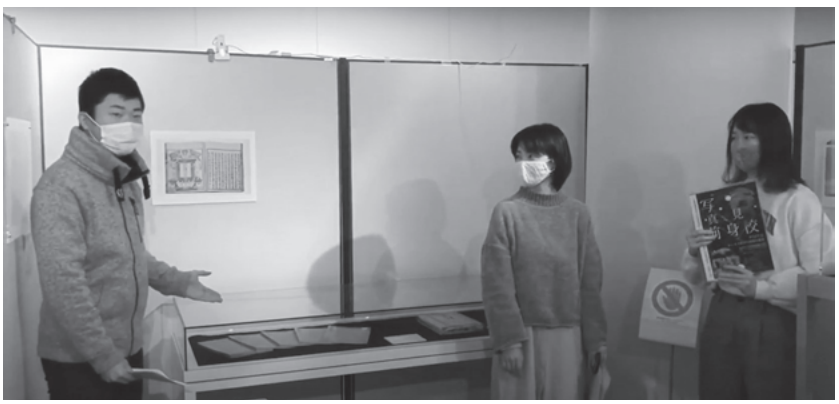


図9. ミュージアムツアー「解体新書コソコソ噂話」の様子[11]

表4. ミュージアムツアーのスケジュール

日程	タイトル	資料・人物	参加人数（人）
12月14日（月）	本企画展の“目玉”!? 高安右人って誰!? ～眼科発展のひみつ～	眼球運動模型 高安右人	18
12月15日（火）	キンダイ医学における お雇い外国人の活躍	ア・ホルトルマン ペイ・ア・スロイス	15
12月16日（水）	ドドネウスによる 精緻な植物書	ドドネウス和蘭草木誌	17
12月17日（木）	解体新書コソコソ噂話	解体新書	13
12月18日（金）	博士の愛したハサミ	肋骨剪刀 医療機器カタログ	10

⑵ ミュージアムツアー動画の配信

今年度は、新型コロナウイルス感染防止のため来館者が学内に限定されたことによって、ミュージアムツアーへの参加者も学内関係者に限定されることとなった。そこで、本企画展では教育普及活動の一環として、ミュージアムツアーの様子を動画として撮影し、インターネットの動画投稿サイトに配信する試みを始めた。

動画の撮影は、次回のミュージアムツアー担当班の実習生が行った。ただし、12月18日の最終回のみ、12月14日（初回）のミュージアムツアー担当班の実習生が撮影した。動画を撮影するうえで特に気を付けた点として、ミュージアムツアーに参加した来館者の肖像権を侵害しないために、来館者が映らないように配慮した。また、動画の編集は、本番が終了した後の当日の午後に、その日のミュージアムツアーを担当した班のメンバーが文化遺産学研究室に集まり、動画編集ソフトを用いて行った。動画編集作業の際には、TAがWebクラウド・サービスに共有した動画編集の手順を示すPDFファイルを参照した。

編集したミュージアムツアー動画は、12月25日から12月29日にかけて、全5回分を動画投稿サイトにて順次公開した。

⑶ 評価

ミュージアムツアーについて、事前にリハーサルを実施していたことに加え、本番直前（11時30分頃）にも予行練習をしていた班もあったこともあり、本番に円滑な進行ができた。また、実習生の立ち位置を事前に決めておいたことで、ミュージアムツアー実施中に参加者が資料を見やすいように工夫することができた。加えて、事前にラミネート加工で作成した資料のイラストパネルを見せながら解説することによって、参加者の展示資料及び関連人物に対する理解をより深めることができた。一方で、ミュージアムツアー参加者の中には博物館実習関係者が多く含まれていたため、より積極的に関係者以外の学生・教員に対する宣伝をするべきであった。加えて、シナリオの内容を覚えきることができず、本番中にシナリオ原稿を見ざるを得なかったこともあったため、リハーサルや班での練習以外でも実習生一人ひとりが各自で練習してくることが必要である。ミュージアムツアー後の質疑応答については、練習及びリハーサルの段階で参加者からの質問を事前に想定していたため、本番では想定外の質問が出されて回答できなかったこともあったが、概ね臨機応変に回答することができたと考える。

ミュージアムツアー動画の編集・公開について、初めての試みということもあって試行錯誤することもあったが、動画投稿サイトにて全5回分の動画を公開することによって、学内外に広く本企画展への関心を喚起することができたと考える。動画の作成に際しては、ミュージアムツアーで実際に使用したイラストパネルの画像を動画内に固定して表示するなど、様々な工夫を試すことができた。一方で、機器トラブルによって動画撮影が途中で中断したこともあったため、撮影者との事前の打ち合わせを入念にする必要があった。また、動画撮影中（ミュージアムツアー実施中）に資料館内の空調機器の作動開始音が入り込み、音声が聞こえにくくなったこともあったため、ミュージアムツアー実施の際には事前に空調機器を調整しておく必要もある。加えて、動画編集作業の際に動画全体の音量が小さくなり、何度か編集作業をやり直すこともあったことから、音量を確認しながら編集作業を進めると良い。

以上の反省点を踏まえ、今後の来館者参加型企画の参考になることを願う。

（古田）

7. 学生展への大学資料館の関わり

金沢大学資料館の学生企画展は、平成26（2014）年度の「植物図「館」」に始まり、以降「破かれた恋愛小説」（平成27年度）、「ハカリモノ」（平成28年度）、「バンカラ寮生類」（平成29年度）、「物録（モノローグ）」（平成30年度）、「いろは」（令和元年度）と、秋冬の定番イベントとなってきた。各年度の年間来館者数の2割前後となる千数百～二千名前後がこの企画展に訪れており、文部科学省の『博物館実習ガイドライン』[1]に準じる授業としてだけでなく、資料館の事業としても重要な位置を占めている。この学生企画展の最大の特徴は、企画立案・資料調査・原稿作成・展示陳列作業・広報・撤収作業等、学生企画展に関わる全てにおいて博物館実習生が主体となっていることである。これは、全国的に見ても極めて内容の濃い博物館実習であり、「世界と地域に開かれた教育重視の研究大学」[12]を目指す本学の教育の特色のひとつと言えよう。

ただ、令和2年度については、予期せぬ新型コロナウイルス感染拡大の影響により、これまでと全く同じ形での学生企画展を行うことは困難になってしまった。それでも、企画展全般において実習生が主体的になるという点は堅持しつつ、資料館もこれまで以上に学生企画展に関わることとなった。以下では、今回の学生企画展への資料館の関わりについて、資料館員の立場から述べることにする。既述の各章と内容が重複する部分もあるが、資料館側からの視点から改めて述べることにしたい。

令和2年度学生企画展「写真で見る前身校PART Ⅱ」は、既述の通り資料館の前期企画展「写真で見る前身校PART Ⅰ」の続編である。元々資料館の令和2年度年間事業として、旧制第四高等学校を扱ったPART Ⅰを春に、医学系前身校を扱ったPART Ⅱを夏に予定していた。しかし、国と県の緊急事態宣言の影響でPART Ⅰの会期が大きくずれて6月19日～10月26日となったため、それに押される形で秋冬にずれたPART Ⅱを学生企画展の題材とすることにしたのである。これは、緊急事態宣言下で第1クォーターが遠隔授業となり、学生が企画案を綿密に議論する場が失われたことへの対応策でもあった。

実習生には、第2クォーターの初めに、資料館が元々用意していたPART Ⅱの内容を示したが、あくまでもそれを敲き台として、自分たちなりの企画展を考えるように伝えた。より具体的に言えば、草野写真コレクションを軸として医学系前身校を扱うこと、資料館が医学部記念館から借用す

るモノ資料を必ず使うこと、建築・人物・教育・臨床を基本とした4部構成とすること、企画展に使用する面積は50㎡前後でおさめること、パネル・キャプションは資料館の雛形に合わせること等を条件として、あとは自由に企画案を作らせることにしたのである。なお、過去の学生企画展では企画展のタイトルから博物館実習生が考えていたが、前期企画展のタイトルが「写真で見る前身校PART Ⅰ」としている以上、その続編として作る学生企画展のタイトルは必然的に「写真で見る前身校PART Ⅱ」にせざるを得なかった。しかし、サブタイトルは実習生に任せることとした。

そして、第2クォーターのうちに、サブタイトル、展示資料リスト、展示構成・レイアウト、ポスター・パネルデザイン等が粗方決まっていった。サブタイトルは「キンダイ医学の源流を辿る」とし、展示資料は資料館が予定していた草野写真コレクション・医学部記念館所蔵資料に資料館の医学教示図・青焼図面等を追加（資料・キャプション班)、それらの資料を系譜・人物・教育・臨床に再分類して展示構成・レイアウトを考えながら（展示班)、それらの内容を効果的に伝えるポスター・パネルデザインの制作（デザイン班）が進められたのである。これに対して資料館としては、学生には調べることが困難と思われる資料情報を提供したり、展示計画に関する実務的な助言をしたりした。

そして、第3クォーターに入って、金沢大学が完全に対面授業再開に戻ったこともあり、本格的な企画展準備に移った。企画書、パネル・キャプション、展示レイアウト、チラシ・ポスター等、展示に関わるもの全てが順次確定していき、10月末から11月上旬にかけて展示陳列作業を行った。この期間、資料館員は企画書、パネル・キャプション、展示レイアウト、チラシ・ポスター等を校正したり、展示陳列作業をサポートしたりした。

また、展示資料のうち医学部記念館所蔵資料は『ドドネウス和蘭草木誌』や『解体新書』をはじめとして貴重資料・脆弱資料を含むため、借受けは10月20日に資料館員の手で行った。この際、写真記録とともに資料状況調書も作成したが、PDF化して実習生にも見ることができるようにした。これは、学芸員業務のひとつである資料借用について、学芸員資格取得を目指す学生に少しでも知ってもらいたかったからである。さらに、貴重資料・脆弱資料の展示陳列作業も資料館員が行ったが、できるだけ学生の希望に沿う形で資料を並べた。ただ、この医学部記念館所蔵資料の借用・展示について、明確に反省すべき点が一つある。それは、資料借用が企画展開始の二週間ほど前になったため、実習生が当該資料の現物を確認するのがかなり遅い時期になってしまったことである。これにより、医学部記念館所蔵資料のキャプションの一部について短期間で仕上げざるを得ず、学生の負担がやや集中してしまった。学生企画展のために医学部記念館から資料を借用することは、おそらく当面ないと思われるが、学生がキャプションを作成する時間についてもう少し配慮すべきであった。

ライティングを含む展示陳列作業については、授業として適切な作業量になった。一部のパネル・キャプションの最終校正が展示開始数日前までかかってしまったが、それでも展示陳列作業期間全体としては比較的余裕があった。作業中は資料館員も立会って、展示什器や照明器具の使い方を教えたり、資料の見せ方についてアドバイスしたりした。その一方で実習生の自主性も高く、アクティブ・ラーニング型かつOJT（On the Job Training）型の実習授業の良い例になったのではないかと思う。

こうして、令和2年11月9日に、予定通り「写真で見る前身校PART Ⅱ～キンダイ医学の源流を辿る～」が開幕となった。

なお、過去の学生企画展になかったこととして、新型コロナウイルス感染拡大への対応が挙げら

れるが、ソーシャル・ディスタンスを意識させるフロアマーカーを制作・設置したことと、来館できない方のためにミュージアムツアーの様子を動画配信したことが特筆される。これらは、今後の学生企画展においても生かすべき展覧会の新要素と言えよう。フロアマーカーについては、ラインテープを任意の形に切り抜いて作るように指示したが、学生が実際に作ったものは資料館が想定していた単純なものではなく、四角形のマーカーでソーシャル・ディスタンスを示し、足形のマーカーで観覧方向を示すという一工夫があった。一方、ミュージアムツアー動画については、ツアー時に学生がスマートフォン等で録画したものを、学生自らAdobe Premiere Proで10分程度に編集して作成した。そして全5回のツアー動画を、資料館から大学広報室に渡し、12月25日～29日の5日間にかけてYouTubeの金沢大学動画チャンネルで順次公開していった。いずれの動画も、年明け早々には視聴回数が三桁に達し、学内外から好評を得た。

それから、展示期間の終わりが近づいた令和3年1月になると、新型コロナウイルスの感染流行状況が全国的に著しく悪化して金沢大学は基本的に遠隔授業になったため[13]、同月21日の撤収作業をどうするかという問題が発生した。資料館員で撤収するという案もあったが、国内の感染状況を見ながら担当教員と資料館員で検討を重ねた結果、対面授業が完全に禁止になったわけではなかったため、実習生を3～5名程度に分けて密を避けることで、学生による撤収作業を実施することにした。こうして、令和2年度の学生企画展も、最初から最後まで、学生主体のまま終えることができた。

以上、令和2年度学生企画展「写真で見る前身校PART Ⅱ」について、資料館員の立場から述べてみた。今回の学生企画展は、コロナ禍で変則的な形になったにもかかわらず、内容の充実した展覧会になっていた。むしろ、写真資料を主軸に置いてモノ資料を組み合わせた点、他館からの借用資料を多く使用した点、フロアマーカーを制作・設置した点、ミュージアムツアーを動画配信した点等を考えると、結果としてこれまでよりも濃密な実習になったと言えるかも知れない。資料館側が用意した企画案をベースにしつつも、学生なりの創意工夫でオリジナリティの高いものに昇華させており、資料館員としても学ぶ点が多かった。コロナ禍前と同じ形の学生企画展に戻っても、今回の経験は大いに生きてくるだろう。

（松永）

註

1　文部科学省2009『博物館学芸員ガイドライン』
2　笠原健司「金沢大学資料館における博物館実習の取り組み」『金沢大学資料館紀要』No.11、2016年3月、金沢大学資料館、55-56頁。
3　同論文57頁。
4　笠原健司，笠原朋与，野村将之，虫明慧子，渡辺司，有村誠「学生による企画展の振り返り」『金沢大学資料館紀要』No. 12、2017年3月、金沢大学資料館、1-20頁。
5　小口歩美，川邊咲子，本庄有紀，笠原健司，菅原裕文，河合望「学生による企画展の報告「ハカリモノ―文系学生が紹介する科学実験機器―」」『金沢大学資料館紀要』No. 13、2018年3月、金沢大学資料館、27-50頁。
6　鈴木彩可，米田結華，室谷颯花，北澤怜子，笠原健司，菅原裕文，河合望「学生による企画展の報告「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」」『金沢大学資料館紀要』No. 14、2019年3月、金沢大学資料館、19-38頁。

7　松下梓，岡田優太，櫻井宇佳，藤本夏実，笠原健司，菅原裕文，河合望「物録（モノローグ）― 資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」『金沢大学資料館紀要』No. 15、2020年3月、金沢大学資料館、1-20頁。

8　岡部睦，松永篤知，菅原裕文，河合望「学生による企画展の報告「いろは―多彩な技術から見る色の世界―」」『金沢大学資料館紀要』No. 16、2021年3月、金沢大学資料館、1-22頁。

9　「金沢大学資料館Virtual Museum Project」〈http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/〉

10　「金沢大学資料館 学術資料データベース」〈http://clctdb.w3.kanazawa-u.ac.jp/〉

11　「令和2年度資料館学生企画展ミュージアムツアー第4回「解体新書コソコソ噂話」- YouTube」〈https://www.youtube.com/watch?v=2si3ePa2tOA〉

12　金沢大学憲章を参照のこと。

13　令和2年11月から第3波と呼ぶべき感染流行が訪れ、特に年末年始にかけて著しく感染者が増加した。令和3年1月8日には東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県に緊急事態宣言が発令され、1月14日には栃木県・岐阜県・愛知県・京都府・大阪府・兵庫県・福岡県も対象地域となった。これら1都2府8県以外の自治体でも、感染状況はかなり悪化しており、独自の緊急事態宣言や感染拡大警報が相次いで出された。石川県でも、ちょうど学生展撤収作業日の1月21日に、独自の「感染拡大警報」（ステージII）が発出された。なお、1月16・17日には大学入学共通テストもあったため、角間キャンパスではなおのこと遠隔授業が優先されることになった。